

どの新聞にも掲載されている「天気図」ですが、朝日新聞では毎年5月1日と11月1日の朝刊から、この天気図が変わります。前日まで載っていたものとは違うのです。もちろん、気圧配置や天気は毎日変わりますので、図の内容は違って当然ですが、それだけではなく、天気図の描かれている地域の範囲が少し異なるのです。5月1日朝刊からの天気図では、フィリピンが左下に入っているなど、北緯20度よりも南の太平洋が広く描かれています。一方、4月30日までの新聞の天気図では、南の方が切り取られている半面、北緯50度以北までシベリア地域などが大きく入っています。なぜでしょうか。

日本の天気は、冬と夏に大きく分けた場合、冬は大陸の高気圧の影響を受け、夏は太平洋高気圧の影響を受けます。また、夏は赤道付近に発生する台風の動きも気になります。つまり、冬は日本列島よりも北の方を、夏は逆に南の方を詳しくする必要があるので、地図を南北にずらすことで、より多くの情報を盛り込む工夫がなされているのだと考えられます。こうした対応は新聞社ごとに違うようですが、天気図と一緒に掲載される各地の天気一覧の場所やその数も、新聞によって特徴があります。

現在、中学校では第2学年で気象を学びますが、年度当初に各季節（春、梅雨、夏、秋、冬）の典型的な天気図を印刷したワークシートを配り、それぞれと同じような新聞の天気図を探して、各季節の典型図の下に貼らせてみせるとよいでしょう。その天気図を使うと、生きた気象を学ぶことができます。今日の新聞の天気図に、3日前からの低気圧と高気圧、前線の位置を赤ペンで記入していけば、今後の天気の変化も予測できます。ぜひ活用してほしいものです。

(鈴木伸男 全国新聞教育研究協議会顧問)